様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２７１１

研究課題名（和文）構文文法の視点からの比較統語論―ドイツ語・英語・日本語の比較

研究課題名（英文）Comparative Syntax from a Construction Grammar perspective: A comparison between German, English, and Japanese

研究代表者
宮下　博幸（MIYASHITA, Hiroyuki）

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：２０３４５６４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：世界の言語の統語的比較は、生成文法では以前より大いに注目されているが、認知言語学の分野において発展した構文文法ではそのような試みは少ない。本研究ではそういった試みの一つとして、認知構文文法の立場から、ドイツ語、英語、日本語において基本的な項構造構文（自動詞構文、自動詞移動構文、他動詞構文、二重目的語構文）の比較を行った。その結果、3言語の相違は、それぞれの言語にみられる基本的な傾向に帰することができると考えられることが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、統語的パターン自体が意味を持つという構文文法の立場から、ドイツ語、英語、日本語の基本構文の比較を行った。類似する基本構文は典型的な場合、どの言語でも似た状況を言語化するのに使われるが、それがどの程度広く、またどのような条件で使われるかに関しては、言語ごとに差異がある。この差異が外国語学習の際の障害となりうる。本研究はそのような差異を明確化した点で、これらの言語を外国語として学ぶ学習者にとって有益となるものである。

研究成果の概要（英文）：In the Generative Grammar tradition, comparative syntax has been focused intensively for a long time, while it has been not much discussed in the Construction Grammar developed in the field of Cognitive Linguistics. This research, as a case study, conducted a comparison with respect to basic argument structure constructions (intransitive construction, intransitive motion construction, transitive construction, ditransitive construction) in German, English and Japanese from a Cognitive Construction Grammar perspective. As a result, it became clear that the differences in these languages can be attributed to the fundamental tendencies observable in each language.

研究分野：ドイツ語学

キーワード：構文文法　比較統語論　項構造構文

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（1）本研究に先んじた科学研究費助成事業・基盤研究（C）『ドイツ語基本構文の構文文法的研究』（研究代表者：宮下博幸）では、Goldberg (1995, 2006) が提案する認知構文文法の立場からドイツ語の基本構文の記述を行い、英語で主に発展した構文文法のドイツ語への応用の可能性を検討した。そこではドイツ語基本構文の構文分法的な把握が、ドイツ語の文法記述において極めて有益な知見をもたらすことが判明した。

（2）その中で新たに出てきた課題が、異なる言語の統語構文の比較対照の問題である。例えば英語とドイツ語においては同じく結果構文が存在するが、構文の使用の条件にはどの程度の共通点や相違点が見られるのか、また系統を異にする言語である日本語の対応構文の差異は構文文法的に見てどのようなものかといった問題である。このような比較統語論的なテーマは生成文法においては大いに注目されているものの、構文文法においてはいくつかの論集を除いて(Fried & Östman 2004, Boas 2010)、十分な考察がない状況であった。

２．研究の目的

以上の背景から、次の 2 点を本研究の目的として定めた。

（1）ドイツ語・英語・日本語を比較して分析することで、構文文法の立場からの比較統語論の基礎を構築する。

（2）3 言語の機能的に類似する基本構文を対象とし、それぞれの言語に見られる構文が有する制約を明らかにすることで、その構文の普遍的な面と個別言語的な面を同定し、さらに可能であれば各言語の構文の制約の背後にある要因を発見する。

３．研究の方法

研究の方法としては以下の手順をとった。

（1）対象とする各言語の基本構文（2 つの自動詞構文・2 つの他動詞構文）に関する先行研究を参照する。

（2）先行研究からのデータに加え、対照が可能な翻訳書や各言語の電子コーパスを用いて、各言語の基本構文を抽出し、用法基盤的な立場から各言語の構文の制約を探る。

（3）さらに可能な場合は、それぞれの言語の構文の制約に関わる要因の考察を行い、それぞれの言語の特徴を見出す。

４．研究成果

（1）まず3言語の自動詞構文（特に［主格名詞句＋動詞］や［主格名詞句＋方向表現＋動詞］）という構文について、英語・ドイツ語・日本語版が存在する物語を用いて、この構文が各言語でどのように用いられているかを比較した。その結果、英語で自動詞構文が用いられる場合、ドイツ語は7割程度、日本語は5割程度の対応が見られることがわかった。対応が見られない場合には、それぞれの言語で別の構文が英語の自動詞構文に対応していたが、典型的な主語が何らかの働きかけを持たない自動詞的状況に関しては、3言語に一致が見られることが多かった。また英語の自動詞構文に他言語では別の構文が対応していることからは、比較に際して、構文全体の体系を明らかにする必要があることが明らかとなった。

（2）上の考察を踏まえたうえで、特にドイツ語の［主格名詞句＋動詞］構文に注目し、この構文がドイツ語においてどのように使われているかを調査した。この構文が他動詞と共に使用される際には、一般に「他動詞の省略」と考えられるが、本研究ではそれを省略とは考えず、この自動詞構文が他動詞と融合することで生じる現象という視点から考察を行った。まず通常2つ以上の項をとる動詞を選び、それがこの構文で現れるかを電子コーパスを用いて調査した。その結果、方向句をとる他動詞以外で、この「自動詞化」が広く見られることが明らかになった。なお「自動詞化」（＝他動詞での自動詞構文の使用）という立場と、「他動詞の省略」という立場の優劣の考察については、今後の課題として残った。

（3）また［主格名詞句＋動詞＋方向規定表現］のタイプの自動詞移動構文の考察を行った。動詞に関する先行研究をもとに、この構文を取ると考えられる動詞を選択し、それらに関してコーパスのデータを集めて分析を行った。その結果、まずドイツ語では何らかの意味での移動物（mover）が存在し、それがある方向へ移動することが想定される場合に、この構文が広く出現することが判明した。英語もほぼ同様だが、英語では移動に関わる対象が目的格として実現する場合も見られた。日本語では本来的な移動動詞を除き、動詞と方向表現のみで適切な文を作り出すことは難しく、さらに補助動詞を加える必要がある。またドイツ語では前置詞句で現れる方向表現が、日本語では「を」格で実現する場合もあった。各言語の自動詞移動構文と他動詞構文の分布については、今後さらに分析が必要である。

（4）さらに目的語を一つとる典型的な他動詞構文を対象として研究を進めた。この構文は 3 言語において二つの項の関係をあらわす事態を言語化する際に最も頻繁に現れるタイプであるが、

主格名詞句や対格名詞句にどのような意味役割を割り当てうるかについては、3 言語で相違が見られた。主格名詞句に関しては、日本語は総じて有生の動作主となることが多いが、英語・ドイツ語においては心理動詞に見られるように、原因や無生の対象が主語となることも多い。また英語はドイツ語に比べ道具・場所・時間といったさらに多様な意味役割の主語を許容し、目的語名詞句に関しても英語は日本語・ドイツ語に比べ被動・被成目的語を広く許容する。また他動詞構文は同族目的語構文として知られるように、本来的な自動詞への拡張が見られる。これは英語・ドイツ語で広く見られるが、日本語は限定的であることがわかった。
（5）二重目的語構文に関して、3 言語の対照を行った。二重目的語構文については、日本語は授与動詞だけではなく受取動詞でもこの構文が現れるが、ドイツ語や英語では不可能である。またドイツ語では略奪動詞でこの構文が可能であるが、日本語と英語では不可能である。以上のような動詞以外への拡張の可能性は言語によって異なるが、授与動詞を中心とした典型的な日本語では授与の補助動詞を使用することで広く拡張が可能となる。またドイツ語では動詞不変化詞によって二重目的語構文が可能となるケースもある。このような点から二重目的語構文を把握する際には、項構造拡大の手段も視野に入れていく必要があることがわかった。
（6）以上の構文の比較により、3 言語の構文上の差異が明らかになった。このような差異に関わる要因として、格カテゴリーの存在、文要素のトピック化の可能性、アスペクトの語彙化の度合い、出来事の空間的もしくは行為的把握の傾向、与格の機能の相違などが候補として想定可能であることがわかった。

＜引用文献＞

① Goldberg, A., *Constructions. A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press, 1995
② Goldberg, A., *Constructions at Work*. Cambridge: Cambridge University Press, 2006.
③ Fried, M. & Östman, J.-O. (eds.), *Construction Grammar in a Cross-Language Perspective*, Amsterdam: Benjamins, 2004
④ Boas, H.C. (ed.), *Contrastive Studies in Construction Grammar*, Amsterdam: Benjamins, 2010

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）
① 宮下 博幸、認識的用法の *wer weiß*、人文論究、関西学院大学人文学会、査読無、第 68 巻第 3 号、2018、63-87〕
② 宮下 博幸、ことばの意味をめぐって ― 言語哲学への言語学の応答、文明と哲学、こぶし書房、査読無、9 巻、2017、200-216
③ 宮下 博幸、認容の標識としての gut、KG ゲルマニスティク、関西学院大学文学部ドイツ文学科研究室年報、査読無、19/20 巻、2017、113-132

〔学会発表〕（計 8 件）
① Hiroyuki Miyashita, Auxiliarisierung und syntaktische Veränderung: Eine Überlegung anhand des Verbs *drohen*, 日本独文学会第 46 回語学ゼミナール、2018
② Hiroyuki Miyashita, Lexical construction or general construction? The constructional status of intransitive motion construction in German, 2018 年ポーランド認知言語学会、2018
③ 武田 有里子・宮下 博幸、*werden* 受動の可否と述語の特性―場面レベルと個体レベル―、日本独文学会2017年春季研究発表会、2017
④ Hiroyuki Miyashita, German modal particles and the cognition of emotion, 第 14 回国際認知言語学会、2017
⑤ Hiroyuki Miyashita, Die intransitive direktionale Konstruktion – Konstruktionsbedeutung und Coercion, 日本独文学会第 45 回語学ゼミナール、2017
⑥ Hiroyuki Miyashita, Comparing Constructions: A Contrastive Study of Intransitive Construction in English, German, and Japanese, International Symposium on Verbs, Clauses, and Constructions, 2016
⑦ 宮下 博幸、心態詞の感情伝達機能 ― 心態詞とその生起環境の分析、日本独文学会 2016 年秋季研究発表会、2016
⑧ Hiroyuki Miyashita, Intransitive Konstruktion: eine konstruktionsgrammatische Analyse, 日本独文学会第 44 回語学ゼミナール、2016

〔図書〕（計 4 件）
① 宮下 博幸 他、日本独文学会、ドイツ語の場面レベルと個体レベルの表現タイプ、2018、3-12, 63-77

② Hiryuki Miyashita 他、Stauffenburg 出版、Parenthetische Einschübe, 2018, 175-190
③ Hiroyuki Miyashita 他、Stauffenburg 出版、Raumerfassung: Deutsch im Kontrast, 2017, 11-32
④ 宮下 博幸 他、日本独文学会、ドイツ語と日本語に現れる空間把握：認知と類型の関係を問う、2016、21-35

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。